

機関番号：33917

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820065

研究課題名（和文） 道教内丹文献及び用語に関する基礎的研究

研究課題名（英文） The Basic Studies on Texts and Terms of Daoist Neidan

研究代表者

長澤 志穂 (NAGASAWA SHIHO)

南山大学・南山宗教文化研究所・研究員

研究者番号：90535329

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて、主要な道教経典叢書に収録されている内丹（道教における一種の瞑想法）について主に説く文献の、タイトル・編著者名・年代等を可能な範囲で記載したリストが作成された。また、比較的重要な内丹用語 30 語について、歴史的変遷・現代の実践における用法・先行研究を総合し、日本語による用語集が作成された。これらは今後の道教瞑想研究にとって有用な成果である。本研究成果はウェブ上で公開され、誰でも利用することができる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I made a list of Neidan(a kind of Daoist meditation)-texts included in main collections of Daoist literature. This list contains not only title, but also the name of the author and date as much as possible. In addition, I made a Japanese glossary of 30 important Neidan-terms, considering their historical change, meaning in practice today, and previous studies. These results are useful to further studies of Daoist meditation. The list and the glossary are open to the public on website.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	910,000	273,000	1,183,000
2010年度	230,000	69,000	299,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,140,000	342,000	1,482,000

研究分野：中国宗教

科研費の分科・細目：宗教学

キーワード：道教、中国思想、中国宗教、瞑想、内丹

1. 研究開始当初の背景

「内丹」とは、中国の伝統宗教である道教において行われてきた、瞑想法の一種である。内丹は主に道教徒により継承されてきたとはいえ、その発展は儒教・仏教との相互影響下においてなされ、単に道教という一宗教の修行法にとどまらず、中国的自己修養観が表現された事例であるといえる。

宗教学的研究、特に神秘主義研究や行の研究の視点から見ると、内丹は、東アジアの個

人的宗教実践の一例として、きわだって具体的に特徴的な方法を持ち、なおかつ近代以前の中国において幅広く支持されてきた事例として、興味深い研究対象といえる。将来的には、内丹をヨーロッパやイスラーム世界の神秘思想と比較分析することは、多様な神秘主義的实践が様々な宗教において発生するメカニズムを探究するために有益であると考えられる。しかし、もう一つの東アジアの重要な宗教実践である禅と比べると、内丹の

研究が十分に建設的に進められているとはいえない。

これまでの内丹研究は、個別の内丹文献およびその著者個人についての研究を中心としてきた。これらの先行研究は本研究の将来構想にとっても有益なものである。しかし一方で、道教經典の叢書に収録された内丹文献の総数および全体に占める数的割合、中国における内丹文献の数の時代的推移、主要な内丹文献の著者名と成立年代の情報を含むリストといった、最も基礎的なデータを知るために参照しうるものが、いまだ作成されていない。このような作業なしで、比較宗教学など中国思想を専門としない研究者にも開かれた内丹研究を進めることは困難と思われる。外丹（道教的錬金術）研究の分野では年代の特定できる外丹文献のリストが作成されており、このような研究例を参考に、内丹研究においても同様の作業を進める必要がある。

また、内丹文献の多くは、錬金術のプロセスを説明する用語を比喻として用い、体内の気の操作をどうイメージすればよいか説明している。内丹の構造を現代の研究者が把握しようとするならば、これら内丹の特殊な用語について理解しなければならない。これまでもそういった試みがなされなかったわけではないが、目にする頻度が高いにもかかわらずいまだ十分に説明されていない用語は多い。最も基本的な内丹用語に関して、その意味の歴史の変遷や教派間での差異を考慮に入れつつ、共通理解を確立することが急務である。用語の解明にあたっては、広い意味での内丹も含めた気功について、実践者との対話も参考に必要がある。

以上のように、内丹は、重要な東アジアの宗教的瞑想でありながら、禅などに比べ、いまだ基礎的データの整理が十分とはいえない状況であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、内丹の宗教実践としての構造と機能を明らかにするという将来的構想のもとに、そのための基礎研究を行うものである。具体的には、以下の二点を主要な目的とする。

(2) 目的一：世界に現存する内丹文献の総数をただちに正確に把握することは、各地の道観などに未発見の文献が所蔵されている可能性などを考えると、非常に困難である。そこで本研究では、現代の道教研究者が参照する頻度の高い道教經典叢書（『正統道蔵』『道蔵輯要』『蔵外道書』『道蔵精華』『道蔵精華録』『道教文献』『莊林統道蔵』『中華統道蔵』『三洞拾遺』）に収録されている文献のうち、主に内丹の方法や理論について説くことを目

的とする文献はどれか特定し、リストを作成する。その際、著者や成立年代について、先行研究をも参照しつつ、特定できる限り記載する。

(3) 目的二：唐から清に至る内丹の歴史上、特に重要と思われる30ほどの用語を選び、その一つ一つについて、文献による語義の歴史の変遷や派生の研究と、国内外の現代の実践家へのインタビュー調査による語の現代的用法の研究とを行う。それらの研究成果を総合し、各語の定義を試み、最終的に用語集としてまとめる。

3. 研究の方法

(1) まず、できる限り一次資料の収集を行う。入手困難な資料については、国内外の図書館等を利用し収集・調査する。また、各叢書の異版についても国内外の図書館において調査する。主に内丹の方法や理論についての記述を内容とする文献はどれか特定し、リストを作成する。その際、著者や成立年代について、先行研究をも参照しつつ、特定できる限り記載する。

(2) 特に定義を共有することが必要と思われる基本的な内丹の術語を30語選定し、その意味の歴史の変遷や派生について文献と先行研究を用いて調査する。また、伝統的内丹用語を現代において理解するための一助として、国内外の気功家や道教修養実践者にインタビューを行い、現代の実践において各用語がどのように理解され用いられているかを調査する。また、現在台湾で行われている道教儀礼を観察し、儀礼と内丹との関係について調査する。

(3) 最終的に、道教文献叢書所収内丹文献のリスト、および用語集をデータベースとしてとりまとめ、ウェブからアクセスできるように公開する。また、海外調査について報告書を取りまとめる。

4. 研究成果

(1) 主要な道教文献叢書に含まれる内丹文献について、これまでになかった一覧表を作成することができた。このリストは今後の内丹文献研究にとって有用な資料となるものである。

調査の結果、道教聖地の地理・歴史書を集めた『道教文献』、および儀礼文書を中心に集めた『莊林統道蔵』には内丹文献は含まれていなかった。

その他の文献については、タイトルと、著者・成立年代を判明可能な限り記載した一覧表を作成した。この表に含まれる全ての情報は、検索機能によって、タイトル名・著者

名・キーワード等を検索することができる。今後の研究において、未研究の内丹文献を探す・同一著者の内丹文献を探す・同時代の内丹文献を探す・複数の叢書に重複して含まれる内丹文献を探す、など様々な活用が期待される。

(2)道教文献叢書に含まれる内丹文献のリスト作成により、今回取り上げた叢書のうち、『道教文献』『莊林統道蔵』を除く叢書に占める内丹文献の数的割合は 2 割ほどであり、道教経典における内丹文献の相対的重要性がうかがえた。

これら全内丹文献のうち、註釈書を含め、明代に作成されたと考えられるものは全体の約 2 割、清代に作成されたと考えられるものは約 3 割に及び、現存する叢書収録文献をみるかぎりでは、明清期にも盛んに内丹文献が作成されていたといえる。一般に道教思想は明清期には停滞し発展があまりみられなかったとされているが、内丹思想に関しては、明清期にも思想的展開が継続されていたことを示唆するデータが得られたといえる。

本データを利用し、いまだ取り上げられなかった内丹文献に注目したり、同一文献の各種註釈の所在や再録状況を調査したり、時代ごとの内丹文献および内丹思想の変遷について調査するなど、様々な新しい内丹研究展開することが期待される。

(3)内丹思想において特に重要と考えられる用語を 30 語選定し、定義を与え、用語集を作成した。選定した語句は以下のとおりである。

回光
火候
坎離（鉛汞、日月、心腎、水火、竜虎）
金丹（神丹、丹薬、薬、薬物、胎、道胎、聖胎、法身）
周天（小周天、大周天）
順逆（逆法）
精气神（鍊精化氣、鍊氣化神、鍊神還虚）
性命（性、命、性命双修）
丹田（上丹田、中丹田、下丹田、炉鼎、鼎器）
内丹外丹（内丹、外丹）
涵養（温養）
氣穴
玄関（玄関一竅、機竅、祖竅、玄竅）
見性
元神識神（元神、識神）
光（真光、性光、陽光、靈光、目光、耳光）
交媾（坎離）
黄庭（中黄）

子午（活子時、子時、正子時）

証驗

真陽（一氣、一炁、一点真陽、真氣、先天真氣）

先天後天

太虚

太極

胎息（真息）

調息

天根月窟（天根、月窟）

斗柄（璇璣）

内薬外薬（内薬、外薬）

返照（反照）

これらについて、従来、道教辞典の類における比較的簡単な説明や、学術論文等において個別に取り上げられることはあったものの、内丹用語専門の用語集はなかった。今回、意味の歴史的変遷や派生、現代の実践における用法、先行研究の成果を総合し、比較的詳細な語の説明を行うことができた。また、説明にあたっては、道教研究を専門としない者にもわかりやすい現代日本語による表現を心がけた。

今回選定した用語 30 語だが、頻繁に言い換えが見られる各語の同義語や、頻出する関連語についても、説明の中に盛り込んだ。よって、実際には 60 ほどの語に説明を与えることができた。本用語集は今後も順次内容が追加される予定である。

(4)本研究を進めるにあたり、台湾における海外調査を実施し、台湾の道教会の儀礼の観察、実践者へのインタビュー、台湾の研究者との意見交換、資料収集を行った。

①資料収集にあたっては、主に、台湾の最高学術機関であり世界的にみても豊富な中国宗教関係資料を有する台湾国立中央研究院を利用した。『正統道蔵』『道蔵輯要』『蔵外道書』『道蔵精華』『道蔵精華録』『道教文献』『中華統道蔵』『三洞拾遺』は日本国内にて確認できる版本と基本的に同じであることがわかった。他方、内丹用語を理解する上での重要資料の一つである『天仙正理』のいくつかの版本を、他の叢書中より調査し、資料収集することができた。

②道教会および儀礼の実際については、まず、高雄県道教会の協力のもと、2010 年 8 月 4 日午前 10 時より、高雄市郊外の東照山関帝廟（高雄県大樹郷小坪村忠義路 1 号）にて開催された関帝の聖誕日を祝う儀礼の一つ「三献礼祝寿大典」を取材し、一連の儀礼のビデオ撮影、写真撮影、参加者への聞き取り調査を行った。当儀礼の式次第、道士の動作の意

味等の分析を通じて、他者救済の儀礼に対し、自力修行である内丹が密接な関係にあることが明らかになった。本儀礼において大陸中国から招かれた道士は、儀礼前に内丹に類する修練を行い内面を浄める。神像の開眼儀礼において、道士は自らの体内から煉り上げた気を新しい像に注入し、生命を吹き込む。それを可能にしているのは内丹瞑想なのである。また、内丹による修練は神像の開眼自体を可能にするのみならず、開眼儀礼全体を可能にする要因ともなっていることがわかる。開眼式の冒頭において、道士は床に敷かれた八卦を踏んで呪術を行う。これは儀礼の場を浄め守りを固める意味を持つと同時に、道士がいったん人間の次元から神々と同じ存在次元まで昇ることをも意味する。このようなことが可能となるのは、道士が内丹を通じて宇宙の根源に通ずる要素を体内に持っているからにはほかならない。内丹と儀礼のこのような関係は宋～清代の儀礼文献に示唆されているが、それらが実際に機能し、現代の道教儀礼中にいまだ生かされていた。また、内丹用語の解釈は、近代以前の内丹文献から汲み取られる意味にほぼ忠実に理解され、現代の変容がみられるケースはまれであった。

さらに、台南市道教会所管の道教寺院を訪問し、民衆の信仰および寺院の活動について取材を行った。そこでは民間の参拝者や誦経団に話を聞くことができた。今回の調査で取材した一般参拝者、寺院の祈祷職能者、誦経団には、内丹の知識をもち内丹を実践している者はみられなかった。高雄県の道教儀礼の取材において、内丹に関わる所作を行っていたのが大陸から招いた道士であったことと考え合わせるならば、現代台湾においては、道教の宗教職能者も信者も、一般に内丹に対する関心はそれほど高くないといえそうである。個別の事例についてさらに調査を進めなければ断定はできないが、事前に台湾各地の道教会から得た、台湾において内丹実践はそれほど一般的でないという見解を、今回の調査は裏付けるものとなったといえる。しかしながら、誦経団の人々は天台止観や坐禅といった仏教的修養法には比較的高い関心を示していた。内丹文献の多くは仏道一致を標榜し、『天台小止観』や禅の語録を頻繁に引用する。彼らにとって、これらの仏教的修養が仏教だけのものであるという意識は特にないかもしいない。内丹と仏教的修養の融合という見地からさらに検討する必要があるだろう。

なお、台南市道教会からは、日本において台南市道教会と緊密に連携を保ちながら活

動している宗教団体「日本道観」を紹介していただいた。「日本道観」はもともと導引術という道教的修養法を基盤として発展してきた団体であり、内丹のような個人的修養法にも関心を寄せていると考えられる。今後の調査対象としていきたい。

以上のことが、今回のフィールドワークによって明らかになったのである。

③台湾の研究者との意見交換については、高雄市の中山大学、台北市の台湾国立政治大学において、台湾の宗教・哲学・人類学・社会学など様々な分野に関わる研究者と対話を行った。この作業を通じて、現在の道教瞑想研究における問題点や可能性、日本と台湾の学術界における関心の違いなどを把握することができた。

台湾における道教研究の方法論は現在、社会学・人類学・宗教学/中国哲学という3つの分野からのアプローチに大きく分かれていると考えられる。

宗教を対象とする社会学においては、現在、慈濟会など積極的に社会貢献活動を行う仏教団体に関心が集まっている。学校や病院の設立、災害救助活動など大規模な社会活動を展開するそれらの宗教団体に比べ、そうした活動が盛んでない道教に対しては、それほど関心が持たれていないといえる。しかし、海浜で巨大な王船を焼く行事など、民衆の生活と密接に関わる道教儀礼については、社会的アプローチによる研究も行われている。そうした儀礼と、環境問題やメディアや商業との関わりが注目されているのである。

台湾には中国人が移住してくる前から独自の生活を営んできた原住民文化が色濃く残っている。それらは台湾の人類学研究の最も注目される対象となっている。台湾の道教は中国から持ち込まれた道教そのままではなく、台湾の土着信仰や原住民文化と習合している。よって人類学的アプローチによる台湾の道教研究においては、道教と土着信仰との融合が重要な研究テーマの一つとなっている。

宗教学・中国哲学分野における道教研究の中心的対象は、儀礼・修養法・道教史の3つと考えられる。このうち儀礼研究は、かつて中国大陆から持ち込まれた道教儀礼が変容しつつ今も存続している台湾の利点を生かし、研究者と宗教的職能者との密接な連携のもとに進められている。当事者たちとの関わりが密である点で、儀礼研究は社会学や人類学に近接しているといえる。一方、修養法(内丹も含まれる)や道教史の研究は、主に文献

を用いた歴史的研究に重点が置かれている。道教史研究はともかく、修養法の研究が実践者との関わりをあまりもたないのは、台湾道教が民衆救済の儀礼履行を主な使命としており、個人的修養という側面があまり盛んでないことによると思われる。例えば内丹研究においては、大陸の研究者と共同でシンポジウムを開催するなど、中国大陸の研究者との連携が比較的密接となっている。

日本においては、道教が他者の文化であるため、中華文化・華人文化の一環として道教を研究するという傾向が顕著である。他方台湾においては、独自の原住民文化をもち、かつオランダ・日本・中国の支配を経験してきた複雑な歴史的背景のもとに、台湾人のアイデンティティの複雑さが道教研究にも反映していると考えられる。すなわち、道教を中華文化・移住者である福建人などの土着信仰・台湾土着信仰の融合体としてとらえようとするのである。

研究の方法については、台湾の道教研究はフィールドワークを中心とする儀礼研究と、文献研究を中心とする修養法研究・道教史研究におおむね分かれている。そのため台湾の儀礼研究は社会学・人類学と領域が近接しており、各分野の研究者間の交流も活発であるといえる。一方日本においては、儀礼研究も修養法研究も主に文献研究によって行われてきた。日本では道教研究はかなり専門性の高い分野と認識されており、宗教学や社会学の研究者の多くが道教と道教研究についてよく知らないという現状がある。日本より台湾のほうが、道教の学際的研究が柔軟に進んでいるといえるかもしれない。ただし近年、日本の道教儀礼研究者に、台湾の研究者や宗教職能者と連携し、文献による儀礼研究の蓄積を、フィールドワークによる成果と融合させようとする動向がみられる。

なお、宗教社会学についていえば、台湾では今のところマクロな視点からの研究が主流である。例えば、宗教団体の活動が経済や政治に及ぼす影響などが多く論じられる。他方、日本の宗教社会学においては、ミクロな視点からの研究が盛んに展開されている。例えば、当事者個人へのインタビューなどを通じて、内的信仰と個人の地域への帰属意識との関わりを考察するなどである。日本においては道教の宗教社会学的研究自体が少ないため、道教研究として比較することは現段階ではできないが、こうした宗教研究の動向のちがいが今後の道教研究にも現れてくるかもしれない。

このように、今後の道教内丹研究の方向性

をつかむ上で欠かすことのできない貴重な情報を得ることができた。海外調査の成果については、報告書として印刷公表した。

(5)本研究を通じて取りまとめた内丹文献のリスト、内丹用語集、報告書はウェブサイトにおいて公開され、誰でも利用することができる。これによって中国思想や道教に関心を持つ人々にとって有用な研究成果を提供することができた。また、成果の公開は研究者間の意見交換を促進するものでもあり、他の研究者との議論を通じたりリスト及び用語集の更なる充実が期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①長澤志穂、道教の瞑想における光のシンボリズム—『太乙金華宗旨』の場合—、宗教学研究、査読無、363号、2010、pp.447-448
- ②長澤志穂、不還の心としての金丹—道教内丹思想と『首楞嚴経』の関係—、宗教学研究、査読無、367号、2011、pp.290-291

[学会発表] (計2件)

- ①長澤志穂、「道教の瞑想における光のシンボリズム—『太乙金華宗旨』の場合—」、日本宗教学会第68回学術大会、2009年9月12日、京都大学
- ②長澤志穂、「不還の心としての金丹—道教内丹思想と『首楞嚴経』の関係—」、日本宗教学会第69回学術大会、2010年9月5日、東洋大学

[その他]

ホームページ等

<http://shihonagasawa.blog55.fc2.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長澤 志穂 (NAGASAWA SHIHO)

南山大学・南山宗教文化研究所・研究員
研究者番号：90535329

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし